〔II〕 高等学校普通科のカリキュラムについて

倉　田　有　邦

1. はじめに

高校への進学率が上昇の一途をたどり，都会地においてはほぼ行きつくところまで行ったとみられる昨今であるが，それにともなって生活・学習両面にわたり，従来なら高校とは無縁のものであったさまざまな問題が生じていることは周知の事実となっている。量的拡大にともなう質的低下はおおうべくもないわけで，指導要領に示されたいわば最低基準の水準にとうてい達し得ない生徒もかなりの比率を占めているものと推定される。いずれの都府県においても学校差は歴然としており，課程別でいえば実業系の各科，設置者別でいえば私立校が底辺部をより多く受け持たされるかっこうになっていること，更に定時制においてはもろもろの問題を集約的にかかえ込んでいることも周知のことがらである。このような観点からすれば，全日制普通科高校というものは，まだ比較的恵まれた立場にあることは否定できない。とはいうもののこれだけ進学率の高まった現在，いわゆる「よくできる子」の集まりといった従来からの普通科高校のイメージはいやおうなしに変更を余儀なくされつつある。しかもこういった現実にもかかわらず従来からの意識を払拭できないまま現実との矛盾に困惑し，大学入試という更にもう一つの現実とのギャップにはさまれて悪戦苦闘しているのが今の普通科高校の平均的な姿であろうと思われる。底辺こそかかえてはいないがそれに近い層の生徒が，少数派である成績上位層——いわゆる進学一流校はこれらの層のみで構成されている——を基準にしたカリキュラムをあてがわれ，馬車馬のような授業に追われ，3年間履習はすれど修得の方は実質上ゼロに等しいといった状況が全国的にひろがっているのではなかろうか。このような状況の中で，昭和54年度より国立大学の入試方法にかなり大幅な改革がなされようとしており，また57年度からは小・中学校にひき続いて高等学校の教育課程の大改訂が行われることになっている。これらの改革が，過熱化した受験体制に多少なりとも歯止めをかけ鎮静化の方向に向わせることができるか，あるいは受験体制の方がこれらの改革をものみこんでまたまた新手の技術・競争を生み出すか予断を許さない。そこで今回は受験体制の渦中にある普通科高校のカリキュラムに焦点をあてそこにみられる特徴のいくつかを探り，次に国大協共通１次テストのカリキュラムに及ぼす影響を考察し，望ましい姿を考え，ひいては近日発表されるはずの新教育課程への若干の展望を，要望を含めてやってみたい。

2. カリキュラムの類型

(1) 選択制とコース制

いずれの学校においても，何らかの形で文科系・理科系の区別がつくような仕組みになっている。ただしそれが生徒個人の科目選択による場合と，学校で設定したコースによる場合とがあり，全国的にみれば後者のほうがはるかに多いものと推定される。選択制の場合はホームルーム単位でおこなう授業と選択科目との二本立てになっていることが多いであろうが，ともかく生徒の自由意志により，比較的変化に富んだ組合せで選択履習できるのが長所であろう。しかしその反面，その長所を生かすためにはある程度の少人数クラスを認める必要——したがって教師の授業時数をふやす必要——があること，それに生徒の自由意志が安易に行使され，適切とはいい難い選択がなされる危惧もないとはいえない，といった問題点もある。とくに選択制の進んだ段階では，履習単位数に一定の幅を設けてその間の分は履習してもしなくてもよいとする体制——つまり個々の生徒により異なったあき時間ができる体制——をとることになる。(注1) この場合，少人数の要望にこたえることと教師の授業負担との矛盾は解決できるわけであるが，生徒の自主的判断の適確性がかなり厳しく問われることになろうと思われ，あき時間の可否をめぐっても意見の分れるところで，まだそこまでにはふみきれない府県が多いようである。

コース制は大半の高校がこの制度をとっているが大部分の授業がホールムール単位でおこなわれる関係で，時間割作成上の手間があまりかからず，ホームルームの運営上もプラスの面が多い。一方選択の幅は先の選択制に比べればせばめられることは避けられないし，ホームルーム内での等質性が強まるのに対応し，ホームルームどうしの異質性がはっきり出てそれがクラスないしは学校運営上むつかしい問題を投げかけることもありうる。そしてとくに重要に思われるのは，生徒に自由にコースを選ばせた場合，人数の比率が各クラス平等になるようにうまく出そろうことはむしろ少ないのではないかというこ

とである。学級数の多い大規模校の場合は人数のアンバランスも多少は緩和されうるが，たいていの場合，一部の生徒は希望とはある程度異なったコースのクラスへ割りふられてしまうのではなかろうか。選択制の場合とは逆の意味での問題点があるように思われる。

コース制をしいてそれに選択制をからませる方法もあるが，これはクラスそのものが文・理に分れた上での選択であるので実質的にはコース制と考えてよい。いずれにしても選択制をとり入れれば，生徒の選択の自由度は拡大するが，教師の持時間，教室のやりくりなど受け入れ態勢が整っていることが必要である。

（注1） 東京都下および国立大付属校には多くみられる。

(2) コース・選択制の導入の時期

コース制にせよ選択制にせよそれをどの学年からとり入れるかが大きな問題である。現行指導要領のもとでは，第1学年はなるべく共通に履習させるのが望ましいことが示唆されており，大部分の学校もこれには異存ない模様である。次の第2学年における取扱いが大きな分れ目となる。コース制ないしは選択制をとる前提として，生徒の進路適性の発見があげられるが，これが口でいうほどには簡単なものでない。一時的な好悪，偶然のちょっとしたきっかけで自己の適性不適性を決めこんでしまっている場合も往々にしてあり，自分の置かれた環境はもちろんのこと助言・勧告によってかなり変わりうるものであることは，それにたずさわった教師のつねに経験するところである。いったんきまったコースはかなりの拘束力をもって個々の生徒の進路に影響をおよぼす。こういったことから，進路決定をなるべく早くおこない，むだのない合理的なカリキュラムを作るという考え方と，決定をむしろおくらせて共通履習科目を多くし，いずれの進路にも向く素地を養っておくべきだとする考え方が生まれてくる。前者をとれば第2学年からコース制または選択制をとり入れることになろうし，後者をとれば第3学年からということになろう。

第2学年からコース制をとり入れた場合，（選択制の場合には第2学年から実施するケースはあまりないようだ）進路決定は第1学年の末までにおこなわれることになり，本人の意志も十分に固まらぬまま文系か理系か場合によっては就職コースかを決定しなければならない。学校側からの相当強力な指導をともなうことも十分考えられる。とはいえ志望が固まっている場合には2年間にわたって志望に合った科目を重点的に履習でき，現在の受験体制のもとでの有利性は否定できない。筆者の手もとにあるごく限られた資料からではあるが，この制度をとっている学校は大都市よりも地方に多く，また都会地及びその周辺にかぎってみた場合，いわゆる進学一流校に少なく，それに少しでも追いつこうとするかまえを持った高校に多くみられる。地方県に多いのは，予備校の施設に乏しいことから，学校そのものに受験指導を任せる気風が強いこと，大都市校に比べて生徒の学力の校内格差が大きい場合が多いことがあげられよう。また大都市では学校間格差が大きく，伝統に無縁な新設校が新しい校風作りの一環として進学指導にも力を入れ，（いわゆる伝統的一流校だとこの点はまったく生徒の自主的判断まかせといったところが多い）カリキュラムに関しては合理性を徹底させているのが目立つ。文科系の者には英語と国語または社会に大きな比重をかける一方，数学と理科の負担を大幅に軽減する。理科系に対しては数学・理科に多くの時間をかけて社会と国語の負担を大きく減らすといった具合で，（別表 ア. G. H ）これが（平素の徹底した指導と組合わされてではあるが）大きな成果をあげていることはまぎれもない事実なのである。

第3学年のみにコースまたは選択制をとり入れているところは大都市の進学校――東京や名古屋では学校群制度をとっている――に多く，地方でも伝統の進学校といったところはこちらの方式が多いようである。これらの学校では，文系理系共になるべく共通した科目を多く履習させることが教育上望ましいこと，早くからコース分けすることは可能性をつみとる危険性もあり，さらに差別につながるおそれもあるといった説明をしていることが多いようである。しかし半面，そういえるだけの余裕があるということであり，またそうなる必然性もあるのである。生徒の学力格差は小さく（学校間格差はあるが底辺校から見れば上位者中での格差に過ぎない。）無理をしてまでクラス分けする必要はない。また国立大学への指向が強く，大部分の生徒が受験する（たとえそのうちの何割かは志望通りにならなくとも）。したがって第2学年までは共通に履習させることが必要なのである。(注2) 更にこういった学校は自由な校風を持っていることが多く，生徒の自主的判断を尊重するといった気風があって生徒もそれを誇りにしていることが多い。2年生からコース分けして受験態勢をとるのをはばかる雰囲気がどこかにあることは否定できないようである。（別表 ア. A. B）

（注2） 理科と数学の履習単位を減らすと国立大受験はいちじるしく不利となる。

（別　表）

教　科　別　3　ケ　年　合　計　単　位　数　の　例

ア．愛知県内公立高校

	A 校	B 校	C 校	D 校	E 校	F 校	G 校	H 校
国	16, 15	17, 16	16, 15, 14	17, 16, 15, 14	17, 15	17, 16	20, 18, 17, 14 13, (+2)	18, 16, 14, 12 (+2)
社	15, 14	14	15, 11	17, 15, 13	16, 14	16, 15, 12	16, 14, 12, 10	16, 13, 10 (+2)
数	16, 17	16	14, 16, 20	16, 18	14, 17	11, 14, 16, 17	11, 16, 19, 20	20, 18, 17, 14 11 (+2)
理	15, 18	14, 17	14, 17	11, 14, 15, 17	14, 15, 17	11, 14, 18	9, 11, 14, 17 18	18, 16, 13, 10 7 (+2)
体男	13	13	14, 13	15, 13	13	14, 13	15, 13	13
体女	9	9	10, 9	11, 9	9	10, 9	11, 9	9
芸	4	4	4, 3	5, 3	6, 4	6, 4	6, 4, 3	4, 3
英	17, 15	18, 16	19, 18	19, 18, 17	18, 16	18, 17, 16	25, 23, 21, 19 18	20, 19, 18, 17 (+2)
家	4	4	6, 4	6, 4	6, 4	9, 6, 4	6, 4	4
計	96	96	96	96	96	96	96	96
備考	名古屋市内 学校群校	名古屋市内 学校群校	三河部 学校群校	尾張部 学校群校	尾張部 単独高	三河部 単独高	名古屋市内 単独高	名古屋近郊 単独高

（各教科とも左から文科系コースの最大限または最小限より，理科系の最小限または最大限に至る）

イ．国立大学付属高校

	a 校	b 校	c 校	d 校	名大附高	名大附高
国	16, 15, 12	15, 13	17, 16, 15	18, 12	17, 15	17, 15
社	17, 15, 13	15, 13	17〜14	? 13	16, 14	18, 16, 14
数	11, 13, 16	11, 16	12, 16, 17	11, 16, 17	14, 16, 17	13, 15, 17
理	11, 14, 17	12, 15, 18	10〜19	12, 15, 18	15, 18	13, 17
体男	13	13	13	13	13	13
体女	9	—	9	9	9	9
芸	6, 4	4	3	5, 3	4	4
英	15	15	18, 16	19, 18, 17, 16	17, 15	17, 15
家	6, 4	—	4	6, 4	4	6, 4
計	87〜93	85〜96	91〜98	88〜96	96	95
備考	東京都内	東京都内 男子のみ	大阪府内	広島県内	52年度まで	53年度より

（各教科とも左から文科系コースの最大限または最小限より，理科系の最小限または最大限に至る）

(3)　本校のカリキュラム

われわれの学校は各学年3学級の小規模校であり進路別にクラスを固定したコース制はもとより不可能であるが，それにもまして各ホームルームを平等にすべきだという意向が強い。当然選択制をとることになり，現在のところ第3学年において6単位分を文・理に分けた選択科目にあてている。(別表イ.)このカリキュラムは発足して5年になるが，ここ1，2年若干の支障が感じられるようになった。それは文科系の進学希望者に関するもので，理科の負担が重過ぎるのではないかということ，第3学年での日本史の必修分と選択分とのかみあわせがうまくいか

ないということがそのおもなものである。これらは発足当時からいくぶん指摘されていたことがらなのであるが，ここ2・3年来の本校生の平均学力の漸次低下と格差拡大（本校の入試方法の改革と密接な関係がある）により，かなり明確にうかびあがってきたといえる。そこで52年度後半からカリキュラムの手なおしに着手し，12月ごろに53年度からの改訂版を決定した。（別表イ.）改訂の骨子は選択科目の幅を拡大することによる文・理の区別の一そうの明確化と，第3学年に対する1単位減による負担軽減である。従来それほど問題はなかった，理科系進学者に対する選択科目はそのままとし，文科系の者に対しては理・数の負担を軽減し，その分社会・国語ないしは家庭科でうめることになる。第3学年の1単位減は従来第2学年で履習させていた地学Ⅰの1単位分を削除することからくり上げてあみ出したもので，生徒に対する負担軽減と共に，選択科目拡大にともなう教師の持時間増の緩和の効果もあわせ持っている。生活指導上の問題点については，全員一斉の1単位減であり途中の空き時間が生ずるわけではないのでまず問題はなかろうということに落ちついた。とはいえ，少くとも同一学年での履習単位数はそろえる（始業時と終業時を一致させ，空き時間も作らない）という大前提を変えることを是認するような空気はまだ出ておらず，愛知県内ではもっとも自由な雰囲気をもつと思われる本校でもそこまではふみきれないといったところである。大幅な自由選択を認めるのが普通になっている一部の都府県や学校の存在を思うと，高等学校というものの在り方についてはその見方にかなり大きな相違があり，それには地域差もまた非常に大きいことがわかるのである。

3. 国立大学1次テストの影響

54年度からの例の1次テストの実施をひかえ，全国的にカリキュラムの再検討を始めている高校が多いようである。各校の情報は現在のところ聞き及んでいないので，一般的な原則を述べるにとどめておきたい。

もともとこの改革は過当な受験競争を緩和させる目的でなされたはずのものであるから，1次テストめあての新たな受験準備に血道をあげるのは何といっても本末転倒といえよう。現在でも受験対策のみに腐心しているようなところでは，この改革も単なる対策上ないしは技術上の変革に過ぎないものであろう。理科2科目に具えて文科系の者にも第3学年で2科目履習させ，名目上は化学Ⅱ，生物Ⅱなどとなっていて実はそれぞれⅠの復習のみにあてる——日本史をむりやり第2学年に移して倫社を割愛する——名目上は数Ⅲでも実は数Ⅰの復習だけ——などといった変更は受験準備以外の何物でもなく，1次テストの悪影響とみてよいであろう。

しかし一方，従来のカリキュラムも従来の入試に密着したものであったことは否定できない。非進学者が多数いる学校でも進学向きのコースあるいは科目しか用意されていないケースは実に多いのである。文部省の示している教育課程の編成例Ⅰ～Ⅵにあてはめてみると，各校で定めているカリキュラムはほとんどが国立大受験コースともいえるⅠ，Ⅱ，Ⅲ型に集中しており，進路，適性・能力への対応を考慮したⅣ，Ⅴ，Ⅵ型に相当するコースまたは選択科目はほとんど見当たらないようである。これが高校進学率が90パーセントをこえる実情（普通科は比較的恵まれたほうだとはいえ）に適合したものだとはとうてい思えない。共通1次テストがこのような現状に多少なりともブレーキをかける効果を持ち得ないものであろうか。例えば現在たいていの普通高校で忌避されている英語A，基礎理科などの科目をもっと大幅にとり入れる気運が生じてもいいように思われる。英語Aは生徒の学力の実態から見た場合，英語Bよりも全国の過半数の生徒にとってはるかに実情に適合した程度のものである。実際に身につくものをしっかりやらせるほうが何一つ修得させていない形式だけの修得単位でトコロテン式に送り出すよりもはるかに教育的である。また基礎理科は，現在あまりにも細分化専門化しすぎた理科の各科目にかわり，それらを統括し枝葉末節を切り捨てて理科的なものの見方を養うことをねらいとしており，受験準備的要素からほど遠いものである。これらの科目を履修しておれば1次テストと平素の着実な望ましい形での勉強とを無理なく両立できると思われるのである。そしてそういう方向でのカリキュラム改訂なら大いに望ましいものといえるであろう。ただ仄聞される各校での改訂が，この方向のものでないことは，受験競争の根の深さを改めて痛感させられる。

4. 新指導要領への展望

57年度から実施される予定の改訂指導要領は，公示がかなりおくれており，53年6月ごろに発表される模様である。この骨子については中間発表などからある程度明らかになっている。要するに，量的拡大とそれにともなう質的変化をとげた高校のありかたをふまえ，義務教育に準じそれに直結する要素と，多様化した個々の生徒の進路・適性に応ずる要素——単一化要素と多様化要素——を融合（というよりも接木）したものとでもいえようか。第1学年では，現在普通科と職業各科とでかなり大きく異なっているのを，今度の改訂ではほぼ統一化していわば中学3年間の総復習と

いったような形にするようである。落ちこぼれを少しでも少くしようとする意図が働いていることと思われるが，全国的にみられる学校格差により，一方ではゆとりはあるがいかにも手ぬるく張りのない1年間になるおそれもでてこようし，すでに義務教育期間中に落ちこぼれていた層がわずか1年間で歩調をそろえることができるようになるとも考えられない。したがってこの期間は，個々の学校の実状に応じ，名目上は単一であっても，実質上は非常に多様な取扱いをしなければならなくなることと思われる。そしてその間をぬってゆとりをもっぱら受験対策上の実力養成にあてる学校も出てくるのではなかろうか。

第2学年からは従来よりも選択科目の幅を大いにひろげ，進路・適性に直結させようとする。普通科についてみると，ここでコース制をしき，それにもう一つ選択制を併用するのが全国的に一般化するものと思われる。従来よりも選択を多様化させようと思えば，教師の持時間は当然増えることになるが，一方で生徒の履習単位数の負担軽減もあるからある程度緩和もされる。しかし進路・適性に真に応じたものにするには，現在東京都下あるいは一部の高校だけで行われているような，「あき時間」の存在を気にしない本当の意味での選択の時間も設ける必要がでてくるように思われる。これには高等学校のあるべき姿をどうとらえるかによって賛否大きく分れるところとなるのではないか。また第1学年の後半ぐらいから，進路・適性についてのきめ細かな指導がなされる必要も生じてくるであろう。これも一歩はずれると，第1学年から，受験技術的側面のみから判断した進路指導が徹底しておこなわれるという事態を生みだすかもしれない。

かなり先のことになるが，共通1次テスト（そのころまで存続しているものとして）のありかたは，この新教育課程の成否に大きな影響をもつものと思われる。(逆にそのテストの成否も問われることになるのだが)。第1学年の共通必修部分になるべく大きな比重をかけるようにし，第2学年以降の選択部分はなるべく第2次試験の方に委ねるようにしてもらいたいものである。そうしないと，多様化すべき選択科目も，実質上の必修科目となってしまい，適性に応ずる要素など消しとんでしまうからである。

総じてこの新教育課程は，従来のものよりは現実的であり合理的である。しかしその合理性のゆえに，学校の方針如何では，現実の入試に「むだ」なく全力を注入することも可能となろう。一方，入試にとらわれずユニークな校風をめざすことに，学校の自由裁量分とゆとりをフルに活用することも可能であろう。そして多くの学校ではその両者の間で何らかの決定をせまられることになるのではないかと思われる。